

第五回「絆・ベルリン」ボランティア活動報告(4月21日から5月3日まで)

非常に個人的な報告であることを最初に断っておきたい。それとメンバーは敬称を略した。

4月21日(月)晴れ。ドイツから成田到着。

夕方6時にドイツからの参加者6人がトルコ航空機で成田空港に到着する。7人の予定だったが、クラウスが急病で出発直前にキャンセルし、6人になった。筆者は別の報告に記したように4月11日に来日して、4月12日にドイツとチェルノブイリの市民団体を関空で迎えている。その時はトルコ航空の飛行機が5時間遅れで夜中に着き、空港内のベンチで仮眠を強いられた経験があるので、とにかくほっとする。市川組の広瀬芙美子と村松庄次郎の3人で出迎える。レンタカーは翌日から借りているので、車は村さんの一台しかない。その一台に全員のトランクを積み込む。一人分の座席が空いていたので、フラウケを乗せる。我々は成田空港から京成電車に乗り、市川市八幡まで行く。9時を回っていた上に翌日から全員が一緒に行動するので、恒例の歓迎会はしなかった。合宿のように女性群(軍)と男性群(軍)に分かれ、廣瀬家に4人、村松家に5人で泊まる。

4月22日(火)晴れ。市川から岩手県大船渡への移動。

男子は全員6時には起き出した。ただ、レンタカーの受け取りが朝の8時なので、それまで簡単な朝食をとったりして時間をつぶす。副団長のフランク・ブローゼは新幹線と三陸鉄道を乗り継いで行くので6時過ぎには家を出た。8時過ぎに車の運転を任されている村さんとフランク・バイヤーが車を受け取って戻ってくる。我らの荷物を積み込んで、廣瀬宅に女性グループを迎えに行く。市川から高速に乗り、東北道を北上する。10時過ぎにそろそろお腹もすいてきたのでサービスエリアに入り、おにぎりなどを買って食べる。さらに1時頃に昼ご飯を食べる。去年に比べて我々の来日が2週間早いのと、今年の冬が長かったので、景色は全体的に灰色だった。だが、幸いに櫻は咲いていた。いつものことだが、淡いピンク色の山桜が山腹にふわっと浮き出るように咲いているのは見事だった。山桜を目の保養にして、午後の5時前には大船渡市に到着した。フランク・ブローゼはすでに3時過ぎには着いていた。

宿の「福祉の里センター」で早速旅装を解き、風呂に飛び込む。温泉宿並みの大きな風呂はいつも我々の大きな慰めだった。ドイツ人もこの共同風呂に慣れると、日本式に一日の終わりに入る風呂を待ちこがれるようになる。風呂の後、食堂に行き、一日中運転してくれた村さんに早速ビールをご馳走する。夕食は相変わらずのボリュームでおいしかった。二人の新参加者(マリアンネとベルナー)がドイツから来た上に、名古屋から参加の村瀬靖昌も到着したので、食後にロビーで全員で簡単な自己紹介を兼ねたミーティングをする。ドイツ語で話し、山田頼子がいつものように市川組の二人のために同時通訳をしてくれる。

4月23日(水)晴れたが、寒かった。メガソーラーとワカメ取りと陸前高田市副市長訪問。

早朝東京から夜間バスですでに3回参加している戸谷美津子が到着する。7時の朝食はいつものごとくソーセージとオムレツと納豆の定番だ。みそ汁も付く。今日は二手に分かれる。第一グループはフランク・ブローゼと僕が村さんの運転で遠野市に行く。ベルリンからPVDP(太陽光発電会社)社の社長一行がメガソーラーの商談のために遠野市に来るのだ。話せば長くなるが、今年の夏に筆者がベルリンで、長崎の沖合の島に大きな太陽光発電所のプロジェクトがまとまったという日経新聞の記事を読んだ事から始まる。調べるとベルリンの会社だったので、早速会いたい旨のメールを送る。数日後に社長のゲルステマン氏が承諾の返事が来る。そこでフランク・ブローゼと一緒に訪ね、津波の被災地の三陸地方でメガソーラーの建設が考えられないかと持ちかけると、土地さえ用意してくれるならやるよとの返事。パネル設置に必要な傾斜度15度までの土地が50ヘクタールあれば、十分、少なくとも30ヘクタール、そして土地は賃貸か購入、どちらにしても20年は必要との事。早速「遠野まごころネット」のプロジェクト・マネージャーの及川さんに連絡すると、土地はあるとの返事がくる。その旨、ゲルステマン氏に伝えると、東京事務所に調査に行かせるとの連絡が入る。秋にはエンジニアの一人が遠野を訪れ、調査すると、可能だとのこと。何度か及川さんとやりとりがあった事は知っていたが、偶然にも23日に一行の訪問があるというので、挨拶も兼ねて会うことにしたのだ。まずは及川さんと「遠野まごころネット」で落ち合った。ゲルステマン氏は、前もって連絡してなかったので、我々を見てちょっとびっくりしたようだった。ベルリンからはプロジェクト・マネージャーとロシアの投資会社の社長、さらに東京から所長の村上さん、通訳とエンジニアの一行6人だった。まずは発電所予定地の視察に出かけた。もともと牧野だったが、福島放射能汚染のために使われなくなってしまったのだそうだ。午後の1時から遠野市の市役所で副市長さんと関係するセクションの課長さんたちが5人ほど出席した会合が開かれた。事業企画書にそって説明された。事業規模1000億円、使用予定地2000ヘクタールと聞いて、僕もびっくりしたが、遠野市側も驚いていた。資金はPVDPが責任を持って集め、施行その他も自分たちでやるとのことだった。土地の使用許認可取得に協力してほしいというのが要望だった。市側は前向きに検討すると答えた。帰り際に、ゲルステマン氏がベルリンに帰ったら、ぜひ会いに来てくれと言ってきた。

この話を聞いて、これだけの国際資本が乗り出して来るには、利益率は30%以上だと確信した。日本ではフクシマの原発事故を受けて再生可能エネルギー、特に電力の固定買い取り価格制度が2年前に発足し、1キロワット45円と高いのだ。ということで、利益を外国に持ち出されないように、自分たちで地域発電をすべきだと考え、後で及川さんと理事長の多田さんに相談を持ちかけ、ぜひ自分たちで地域発電をやってくれるよう、つまり地産地消で行くべきだとお願いした。二人はやりますと心強く答えてくれた。

第2のグループは陸前高田市役所の観光課が手配してくれた、ワカメの根切りをし、塩入りの湯でさっと茹でる作業をした。1時間半ほどで終えてしまい、ちょっと手持ち無沙汰だったそうだ。復興ツーリズムと称し、いくつかのプログラムがあるが、本格的なボランティア活動を求めて来た我々に



は物足りなかった。

午後の4時から高台に建てられた仮市庁舎で久保田副市長から現在の復興状況についてレクチャーを受けた。オックスフォード大学留学の履歴を持ついわゆるキャリア組で非常に手際よく状況を英語で説明してくれた。質問にもきちんと答えてくれた。気仙川の向こう側の山を崩して、ベルトコンベヤーで川を越えて土を運んできているが、これによって1年半ほどで市の中心部を10メートルの高さにかさ上げする工事が完了するとの事だった。恐竜がのたうち回っているようなベルトコンベヤーが走る 工事現場は壮観だった。たしかに10メートルの盛り土が積み上げられて行く光景はいかにも復興が進んでいるとの印象を受けた。川の向こう側の土を削り取られた高台には住宅を建てるそうだ。ある意味で一石二鳥とも言える案なのだが、地面が安定して、建物が建てられるまでには数年かかるだろう。



4月24日(木)快晴。ベルリン・ハウス訪問。

ベルリン・ハウスを訪問する。まず慰霊碑の前で津波でお亡くなりになった18名のご冥福を祈り、黙祷する。次に昨年5月に植えたリンゴの木の生育状態を見る。1昨年の10月に植樹したのが厳しい冬のためにほとんど全滅してしまったので、5月にもう一度植え直したのだ。すこぶる発育がいいのでみんなで喜ぶ。上長部の方々がありがたいことにさらに木を斜めに切った名札を用意してくれたので、それぞれ名前を書いてネジで取り付ける。そこに青森の八戸から江渡さんがわざわざ駆けつけてくれた。江渡さんは昨年の紅玉植樹をインターネットで知り、筆者がドイツにいる間に連絡して来たのだ。ドイツのリンゴ種類をよく知っていて、ご自宅の庭にもたくさん植えてあるそうだ。その上、サクランボの苗を数本持って来てくれた。日本のサクランボは甘いですが、彼のはドイツで多いジャム用のすっぱいのだ。

昼前にベルリン・ハウスに入り、地元の方々から心のこもったおもてなしを受ける。地区長と副地区長が新しくなったと、菅野隆さんと小泉正樹さんが挨拶する。菅野さんが我々への歓迎の言葉を述べる。小泉さんが司会をして、地元を代表して菅野恵二郎さん(社団法人「上長部の郷」代表)がベルリン・ハウスがいかに地元のために役立っているかを語る。テーブルの上にはご馳走が盛

大に並ぶ。昼過ぎに我々のメンバーのフラウケのコンサートが始まる。伴奏は昨年同様高木香織さんにしてもらおう。途中でフランク・バイヤーもギターを弾いて、フラウケの伴奏をする。ビールとお酒がつがれ、会話も宴もたけなわになる。コンサートの後は小泉さんの絶妙の司会でカラオケも始まる。



満腹になり、上長部の方々とお別れをしたところで、昨年建てられた茶房「結」にお邪魔する。先ほど心のこもった挨拶された菅野恵二郎さんと奥さんが中にいらして、震災当時の話をしてくれる。お二人の家はベルリン・ハウスから 100 メートル山に入ったところにあり、津波は家の前で止まり、直接の被害は受けなかった。そのためたくさんの被災者の方を無事だった家の中に受け入れ、時には30名ほどが寝泊まりしていた。そしてお米が濡れずにあっただけで近所の皆さんに分けて喜ばれたそうだ。最後の方は3か月もいたそうだ。合間に陸前高田の市役所に勤めていた一人息子さんが津波でお亡くなりになったことを淡々と話された。我々はじっと聞き入って立ち尽くしていた。奥様のお顔が菩薩さまのように見えたのは気のせいだけではなかったのではないか。

帰りに大船渡市に寄って復興状態を見る。昨年に比べて多少建物が増えたが、陸前高田のような大掛かりな工事は目につかなかった。津波で壊された魚市場が新築されて、4月30日にオープンした事を記しておく。内部から見学できなかったのは残念だった。

4月25日(金)晴れたが、風が冷たかった。「カモメネット」での作業。

今日は福祉の里センターを出なくてはならない。前からの予約が入っていて、荷物を置く場所もないとの返事。立根町の公民館で雑魚寝するつもりだったのだが、前から交流のある長洞仮設住宅の安城さんから、住宅に空いているアパートがあるし、公民館も使ってもいいという有難い申し出があったので、荷物を持って移る。

ベルリンからメールでやりとりをしていたサポートセンター「カモメネット」を訪ねる。住所と責任者の後藤さんの携帯電話番号を持って出かけたが、どうもよく分からない。途中陸前高田市のサポートセンターを通りかかったので、聞いてみたら、後藤さんに電話してくれた。彼の指示にしたがって走り、指定された場所に着いたが、「カモメネット」の小屋が見当たらない。もう一度後藤さんに電話すると、反対側に行っているとの事。陸前高田市の前の海は広田湾といい、地図で見ると東側に両替(りょうがえ)という漁村があり、湾の反対側に要谷(ようがえ)という漁村がある。後藤さんの電話での地名の発音がよく聞き取れず、サポートセンターの人(多分地元の方ではなかった)も間違えてしまったのだ。結局10時の予定が11時になってしまったが、大人の趣のある後藤さんはゆうゆう慌てず、怒るところかゆっくり来いよとやさしく声をかけてくれた。行ってみると上長部の隣りにある気仙町福伏(ふっふしと読む)だった。港から100メートルほど離れた場所にある「カモメネット」小屋に着くと、昼ご飯を食べてからでいいよというので、まず土地勘を養うために港を見学した。港の岩壁では若い漁師さんがカキの養殖の準備をしていた。牡蠣の小さな種が干涸びた状態で置かれていたので、漁師さんに聞いてみると、2、3日水をやらなくてもまったく平気だとの事だった。

午後から花壇の整備をした。前のグループがまいた種から花(けしの花とカリホルニアポピー)が育っていたが、その中に雑草が混じっていたので、その雑草を引き抜く作業だ。それと花が密に育っている箇所では間引きして他に移すのだ。天気もよく、楽しい作業だった。



帰りにフラウケのコンサートの可能性について話し合うために奥さんたちが切り盛りしている「りくカフェ」に寄る。閉店時間の4時に何とか滑り込む。大変喜ばれた。「りくカフェ」のみなさんの合唱で迎えてくれた。結局30日の昼過ぎにミニコンサートをすることを約束し、おいしいコーヒーを頂く。

その後街中のスーパーに行き、夕飯の買い物をする。3年前のボランティア活動では夕飯が出なかったのだから、毎日このようにして食べたのだ。スーパーで好きなものを買込み、公民館の一室で食品を大きなテーブルに広げ、みんなで分け合いながら、食べる。とても楽しい。問題はスーパーの献立がどれもこれもおいしそうに見えて、いつもつい買いすぎてしまう事だ。地元のサポーターの今野さんご夫妻がタケノコ料理の差し入れを持って訪ねてくる。去年は今野さんが自宅の山で掘り出して来たタケノコを奥さんが料理して振る舞ってくれた。今年は早いので地元のタケノコはまだ出ていないとの事だった。ドイツでは味わえないタケノコ料理に我々は舌鼓を打った。

さて睡眠だが、男どもは6人が集会場に一緒に寝る。高齢者が多いので、いびきで睡眠が邪魔されることが多い。今回はドイツの友人の推薦でシリコンの耳栓を持って来たので、早速試す。たしかにシリコンはぴったり耳の穴にくっつくので、外からの音はほとんど遮断される。幸いに6時間ほどぐっすり眠る。シリコン様々だった。

4月26日(土)快晴。温度も上がる。大槌町でのドロの木植樹準備とボッシュ財団。

朝早く埼玉から土屋恵子が到着する。彼女は2回目の参加だ。今日は大槌町の伝承館(鹿踊を伝承するための組織で、その建物は震災の時には数百人の避難所にもなった)の人たちと「ドロの木」(かんなで薄く削って鹿踊りのたてがみに使われる木。成長するには30年以上かかる)の植樹の準備をする。9時半に大槌町の入り口にあるホームマックで「遠野まごころネット」の臼澤さんと落ち合う。一緒に山を車で上る。山頂に到着するとすでに伝承館長の東梅さんや皆さんは作業を始めていた。「ドロの木」の苗木を植える場所を枯れ木などを除いてきれいにする作業だった。2時間ほどで済んでしまい、全員伝承館に行く。けんちん汁など昼ご飯をご馳走になる。昨年「翼」に参加した高校生の高橋菜央さんと佐藤秋さんが一緒に植樹を手伝ってくれたので、とてもうれしかった。



早く作業が終わったので、同じ大槌町で建設が始まった「一つ屋根の下で」の進捗状況を見に行く。これはボッシュ財団の寄付(20万ユーロ)で建てられるが、2012年の春以来土地のインフラ問題で工事開始が遅れていたのだ。現場に行ってみると、すでにコンクリート打ちが終わっていた。ここまで来れば、完成は早く、8月には竣工できるとの及川さんの話だった。同じ敷地内の隣りにはJTI Foundationの支援による大槌たすけあいセンターが完成し、内装工事に入っていた。敷

地内では2本の風車が軽快に回っていたが、いかにも NPO が施行しているプロジェクトだなと思った。公民館の内部に入れてもらおうと、気の香りがふんとふんとしてとても気持ちがよかった。パソコンが一台置いてあり、2台の風車が生み出す電力を示していたが、量が瞬間的に変化するのが分かった。これではトランスと蓄電池がないと実際の使用には耐えない。ドイツのエネギーシフトでも効率のいい蓄電池の必要性が叫ばれているが、開発がなかなか難しいようである。



4月27日(日)快晴。暑いぐらいの温度。大槌町でのドロの木植樹と浄土が浜。

昨日は約束時間より30分以上も前に着いたので、今日も楽勝と思ったのが躓きの元になった。今日は今野さんご夫妻も参加。今野さんの車に乗る。走っている途中で広場に江戸時代の衣装をまとった行列が待機しているので、一目見ようと停まったのがいけなかった。警備員が飛んで来て、遠くの駐車場に3台とも回されてしまった。10分ほど大名行列を見学する。そのため、約束の9時半より10分ほど遅れてホームックに到着する。待っていた臼澤さんたちとただちに山頂に向けて出発する。10時20分ほどに植樹の場所に到着するとすでに神事の行事は始まっていた。神主が祝詞をあげる中、150人ほどの参加者が神妙に聞いている。近隣の鹿踊りの団体がすべて参加し、信州でドロの木の植林をしている団体も来ていた。今日は昨年「翼」に参加した高校生の阿部み

ずきさんが一緒に植樹を手伝ってくれた。神事の後には5団体による鹿踊が行われた。大自然の中での30人ほどの踊り手による色彩豊かな鹿踊は壮観だった。この後きのう準備した場所に1時間ほど植樹をする。植樹の後には全員が伝承館の昼食に招かれる。植樹の無事な終了を祝って乾杯をする。テーブル上には刺身、天ぷら、オードブル、煮込みなど山海の珍味が山と積まれているが、同席者と挨拶と会話もするのであまり食べられない。副団長のブローゼが「絆・ベルリン」を代表して挨拶をする。そして10万円の寄付を東梅さんにお渡しする。とにかく東梅さんのこれだけの人を動かし、まとめあげていく動員力というか、組織力は素晴らしい。

この後高校生の阿部美月さんを宮古市に送りがてら、有名な浄土が浜にドライブする。古くから日本の浄土信仰で想像する浄土のイメージにぴったりの風景だ。夜の9時過ぎに土屋恵子が夜間バスで埼玉に戻る。

4月28日(月)曇り時々晴れ。上長部での花壇作りと長洞仮設住宅での作業。

午前中は上長部の菅野さんからの要望で、ベルリン・ハウスの反対側の畑の端に花を植える。午後から長洞仮設住宅の友結(ゆうゆう)ファームで作業をする。女性軍は畑に種をまいたり、球根を埋めたりする。男性群はビニールハウスの修理をする。1メートル90センチのベルナーの活躍がめざましい。作業後は長洞仮設住宅のみなさんとお茶身話をして、交流を深める。

4月29日(火)曇り時々晴れ。「翼」2の選考面接とカモメネットでの花壇作り。

第一グループは「翼」2の最終選考のために遠野市の市民センターに10時に行く。昨年同様「遠野まごころネット」の多田理事長、臼澤理事、及川さんが出席、「絆・ベルリン」はフランク・バイヤー、フランク・ブローゼ、山田頼子と小生の4人。19名の志願者を一人15分刻みで面接する。始めは日本語で最後の5分は英語で質問する。昨年の募集要項にはなかった英語力が第一条件として募集したせいか、英語力がレベルアップしているのが分かる。午後の4時には面接を終了したが、5番目と6番目の候補者の甲乙が付け難く、結局6人を招待する事に決める。これで女子4名、男子2名になった。

第二グループはカモメネットで花壇の整備をする。大きなスーパーに寄ってカモメネットで新しい花壇をつくるために花を買う。後藤さんがならしてあった10平米弱の一面を「絆・ベルリン」のためにご自由にどうぞと任してくれたのだ。花の選択には女性の審美眼の方が確かなので、我々男性群は運び屋に徹することにする。買って来た花を植えてみると少し足りないが今日はもう買いにいけない。午後5時に遠野で第一グループと落ち合うことになっていたからだ。我々は「遠野まごころネット」の多田理事長より遠野の郊外にある柏木平コテージに招待されていたからである。豊かな自然の中に建てられたホールのバルコニーでバーベキューを食する。肌寒い温度だったが、所々に火鉢式にたき火を燃やしたので寒くなかった。肉と野菜に舌鼓を打ち、さらに地ビール「遠野ビール」でのどを潤し、話が弾む。夕べを充分楽しんだ後コテージに泊まる。



4月30日(水)曇り時々小雨。カモメネットでの花壇作りと長洞仮設住宅での交流会。

副団長のブローゼが朝早く遠野を去り、青森に出発する。山田頼子は福島的女性たち(「までえ手仕事の会」)に会いに日帰りで行く。我々は2台の車でカモメネットに向かう。途中のスーパーで昨日の足りなかった分を補うためにまた花を買う。全面に花を植え、「絆・ベルリン」の名札を立てて満足する。後藤さんも5月3日にイベントをやるので、回りがきれいになり、満足してくれた。

午後からカフェでフラクケがミニコンサートをする。中学生の4人の女子生徒とカフェの4人がお客様だ。夕方は長洞仮設住宅でお住まいの皆さんにフラクケがコンサートをする。その後では長洞のお母さんたちの手料理を頂きながら、交流をする。話とお酒が弾み、夜の11時頃まで話し込んでしまった。上長部のみなさんから頂いた酔仙の生酒も飲み干してしまった。公民館長の佐々木さんの話によれば、仮設住宅に住むのはたしかに狭いし、いろいろな制約があって、大変だが、いくつかのグループ活動もあり、それなりの連帯感が生まれる。そのため、新居ができて出してみると、そのような人の繋がりが無くなり、孤独感を味わい、戻ってきたいという人もいるとの事。たしかにある地域の中で暮らしていて、津波で壊され、関係のない仮設住宅に入れられた当初は、孤独だったろうが、同じような境遇なので、連帯感も芽生えるだろうし、新しい人間関係も生じるだろう。新居が出来たからといっても苦勞が絶えない。

5月1日(木)小雨。カモメネットでの花壇作りとお別れ会。

三陸における最後の日だ。生憎小雨が降っている。カゴメネットにお別れに行く。後藤さんと二人の男性が雨の中ステージを建てている。道の反対側の畑に去年の花が枯れて残っているので撤去する作業を頼まれた。雨合羽をきて昼過ぎまでにきれいにする。大分汚れたので、銭湯にでも行きたいと後藤さんにいうと、広田湾の反対側に黒崎峡温泉があるから、行ったらと勧めてくれた。雨の中を温泉に行った。これまで見て来た陸前高田の海と違い、奇岩が連なっている荒い海に面した豪快な海岸だった。温泉もいとお湯だった。お湯につかりながら地元の人と話をすると、こちら側では津波の被害はほとんどなかったようだ。

帰りに今晚のお別れ会の買い物をする。6時過ぎからこの3年間で交流のあった方々、お世話になった方々が長洞仮設住宅の公民館にいらっしゃった。我々も入れて全部で35人ほどになった。今回で「絆・ベルリン」のボランティア活動は五回を数え、我々のできる作業はほとんどなくなってしまったので、最後になるだろうと挨拶をする。その後小生が司会役をつとめ、何人かの人に挨拶を頼む。みなさん、とても感情のこもった挨拶になり、涙も見られる。



5月2日(金)晴れ。気仙沼, 南三陸を通過して秋保温泉へ。

朝8時過ぎに車2台で長洞仮設住宅を出発する。今野光子さんが福島県相馬市の友人を訪ねるために同行する。気仙沼に行き、港の回りを見て歩く。去年まで道路のそばに聳えていた大きな漁船は撤去されてしまい、なかった。津波の威力を端的に示すシンボルだったので、何となく寂しい気持ちになったが、住んでいる方々の希望の結果だとすれば、仕方がない。我々は所詮災害ツーリストに過ぎないのだから。途中2012年にボランティア活動をしたホテル兼結婚式場「海洋館」に寄り、津波防潮堤の行方について話を聞く。女将さんが出て来て話をしてくれる。この地区の防潮堤の高さと場所はまだ決まっていず、話し合いが続いている。美しい海岸線を観光資源にしている「海洋館」の経営者にすれば、防潮堤は死活問題なのだ。隣の小泉地区では15メートル(費用200億円)の高さで同意したそう。さらに走って、その小泉海岸に寄る。このサーフィンなどもできる海岸に15メートルもの防潮堤ができるなんて想像もできないとみんなでぼやく。海岸線から内陸を見ると、すでにかさ上げのための盛り土が積み重ねられていた。防潮堤ができれば、内陸に建物建設の許可が出るのだろう。2年前に力を合わせて砂浜で流木を引きずった思い出に浸りながら、なんとなく感傷的になってしまった。それもあって蛇とか竜とかを思わせる小さな流木を拾い、ベルリンのおみやげにした。

次は南三陸に寄る。ほとんど流されてしまった町を、いつものように海岸線近くの小高い丘に上がり見下ろすと、かさ上げ工事のためにダンプカーが走り回っていた。防潮堤とかさ上げが国の指導による津波対策の定番のようだ。

次は仙台の近くの松島で小休止をする。2012年はまだ被害跡が残っていたが、ゴールデンウィークの真ん中とあって、観光客で溢れていた。きれいな島々の織りなす風景を楽しみ、さらに有名な瑞巖寺に詣でる。イカの炭火焼が絶品だった。

午後5時前に秋保温泉の佐藤屋旅館に到着する。今回の3度目の投宿だ。内湯と露天風呂に入り、ロビーで湯上がりの恵比寿生ビールを味わっていると、待ち合わせていたドイツ人の映画監督夫妻が東京からやっと到着する。明日の福島行きに同行する目的なのだ。

5月3日(土)快晴。温度も25度と暑いぐらいだ。福島の「希望の牧場」と飯館村。



7時には朝食を済ませて、8時に出発する。途中浪江町の手前で友人と待ち合わせていた今野さんが降りる。昼には浪江町の「希望の牧場」に到着する。ここは福島第一原発から14kmの地点で、避難地域なので本来住むことは許されないが、吉沢さんは自分が育てた和牛を殺すことはできないと事故以来頑張っている。今回は3度目の訪問である。今年の5月にお会いしたときより元気になっている感じであった。本人も元気だよと意気軒昂だった。牛たちも餌をもりもりと食べて、たくましそうだった。携帯していった線量計で測ると、牧場内では $3\mu\text{Sv/h}$ から $4\mu\text{Sv/h}$ の値が出てきた。年間に直せば、 30mSv/y 以上になり、当然避難区域に入る。吉沢さんのやっていることは自殺行為だと見る人もいるだろう。本人も何度かカミカゼだと言っているのだから、同行したドイツ人メンバーは複雑な表情をしていた。昨年と比べて生活環境は少し良くなっている印象を受けた。入り口に新しく案内小屋が建てられ、壁には吉沢さんが手に取って説明しやすいようにこれまでの経緯を示す大判の写真が飾られている。住居のとなりに「希望の湯」と名前がついた湯場も建てられていた。1時間ほど滞在し、全員で記念撮影をした後、吉沢さんにエールを送り、なにがしかの志を包んでお渡しした。



牧場を出たところに例の黒い除染した土を詰めたビニール袋が山となって積まれた場所があったので、車を止めて測ってみると、袋の上は 4.46, 1メートル離れると 2.04 だった。地面に直に置いてみると、7.78 という最高値が出た。さらに帰路に飯舘村を通ったので、何か所か測ってみた。0.67, 地面では 1.2、さらに雨樋のところでは 7.78 と高かった。ある立派な家に人影が見えたので、車を寄せて声をかけてみたら、除染の準備のために一時的に帰宅した八木沢さんだった。彼の家はまだ除染されていなかった。少し話を伺うと、2011年の6月末までここに住んでいたそうだ。ところが、急に避難の指示が出て家を去ったそうだ。お孫さんなども一緒だったのですかと聞くと、お顔を歪めて、そうなんだと吐き捨てるようにおっしゃったのが印象に残った。お大事にとだけ言って、我々は先を急いだ。福島浜通りから東北道に行くのは山越えをしなければならず、けっこう時間がかかるのだ。途中二本松駅近くを高速道が走っていたので、ドイツ人夫妻を駅前で降ろし、別れた。彼らは真夜中にドイツに羽田から出発するので、渋滞などに巻き込まれるのを恐れたのだ。後でこの判断が正しかったことが判明する。宇都宮付近で雷雨があり、渋滞に出遭ったのだ。羽田の飛行機には何とか間に合う時間だったが、冷や汗をかいた事だけは間違いない。



夜の 10 時頃に市川に無事に到着する。ぼくはさらに船橋の姉の家に行くために市川駅前でみんなとハグをして別れる。フラウケが来年も行こうよと言ったが、ケセラセラと答えた。

最後に2011年9月に始まった「絆・ベルリン」のボランティア活動はこの5回を持って一段落したと言える。我々ができることは本当に少なくなった。ある意味で復興が新しい段階に入ったと言え、喜ばしいことだ。これまで皆さんのサポートによってここまで支援活動を続けられたことに感謝いたします。

大震災、特に津波で破壊された地域には大きな問題が山積している。経済的な問題はそう簡単に解決できないであろう。過疎化の問題もある。工事材料と復興費用の高騰をもたらしつつある東京オリンピックもある。三陸地方でも家を建てようにも材料費と工賃が高くなったので、今は見送りし、早くて2, 3年先になるだろうという話をよく聞いた。これらの大状況に対して我々にできることはない。しかしこれからもベルリン・ハウスのある上長部の方々、長洞仮設住宅の方々、大槌町の伝承館の方々、「遠野まごころネット」の方々とは交流を続け、復興の進展を見守っていきたい。それと「翼」（岩手県の高校生をベルリンに招待するプロジェクト）もできるだけ長く続けていきたい。

最後に一言。2011年3月11日の大震災が残した最大の問題はフクシマである。原発事故そのものが収束していないだけでなく、チェルノブイリにおける低線量被曝による

晩発障害に関する報告を読めば、これから放射線汚染による病気疾患は福島と近県で増えていくだろう。政府の進めている除染後の帰還政策はそれに対立している。両院で多数を占める現在の政治状況では安倍政権の原子力推進路線を変える力はどこにも見あたらない。だから、地域の反原発運動をサポートしていくしかないだろう。具体的には日本の仲間と一緒に次の三つのプロジェクトを微力ながら進めていきたい。

- 1) 福島の子どもたちを一定期間疎開させる。少なくとも年に数週間の保養プログラムに招待する。
- 2) 独占的な電力会社から自立するために再生可能エネルギーを使った市民発電所を多くの地域に作る。
- 3) 移住を望む福島の方々に日本で過疎化が進んでいる地域を紹介し、移りやすいように便宜を図るネットワークをつくる。

2014年5月25日記す。

福澤啓臣(「絆・ベルリン」会長)